



日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

2001年3月1日

AJEL

No. 74

1. 研究部会開催のお知らせ

2. 研究部会報告

3. 学術・文化情報

○ラテン・アメリカ政経学会
2000年度全国大会

○国際シンポジウム「ブラジル
500年—多文化社会への歩み」

○経企庁セミナー「チリの高度成
長の要因と今後の発展可能性」

○シンポジウム「日系ブラジル
人と日本社会—多文化共生の
試み—」

○国際シンポジウム・国際学会
開催のご案内

4. 事務局から

1. 研究部会開催のお知らせ

研究部会への積極的な参加を！

例年、秋（11月下旬～12月）、春（3月下旬～4月）の二度にわたり開催される研究部会（東日本、中部日本、西日本）は、本学会の研究活動あるいは会員相互の交流親睦を深める場として定期大会にも増して大切な機会です。定期大会と同じく、報告テーマの設定、報告者の人選は広く開かれています。

自薦他薦を問わず、日常的な研究活動の場として会員各位の積極的な参加を募ります。

お問い合わせは、東日本：三田千代子（上智大学）、中部日本：二村久則（名古屋大学）、西日本：松下マルタ（同志社大学）の各理事（代表幹事）まで。

研究部会開催のお知らせ

研究部会の開催を次のように予定していま

す。研究発表希望者は気楽に運営委員にご一報下さい。

〔東日本部会〕

2001年3月31日（土）午後2：00～5：00
上智大学7号館第2会議室（11階）

山口恵美子（東京大学大学院）

「メキシコにおける民営化の政治過程：
通信・電力産業の比較分析」

箕輪 茂（上智大学大学院）

「メキシコにおける民主化と統治能力：
統治エリートの変容との関連から」他

運営委員 岸川 毅 T/F 03-5486-6465

t-kishik@sophia.ac.jp

新木秀和 T/F 0489-77-4270

〔中部日本部会〕

2001年4月7日（土）午後2：00～5：30
名古屋大学言語文化部新会議室

運営委員 水戸博之 Tel 052-789-4826

Fax 052-789-4873

〔西日本部会〕

2001年4月7日（土）午後1：00～4：30
公立学校共済組合大阪宿泊所

（旧なにわ会館）・542-0031

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12

Tel 06-6772-1441

発表者 岡本哲史（九州産業大学）

連絡先（担当理事）

松下マルタ（同志社大学）

（自宅） T/F 052-763-5301

（大学） Tel 0774-65-7161

2. 研究部会報告

《東日本部会》

11月18日（土）上智大学で開催。大学院生による2つの意欲的な報告が行われ、参加者

は11名ながら活発な議論が交わされた。前半は3名の共同発表という試みが新しく、理論的な検討を進めようという姿勢からは、熱意が伝わってきた。質疑応答で明らかになったように、モデルの概念化を工夫するとともに、具体的な事例の検証を綿密にしていくことが、今後の課題となるであろう。第二報告は急遽決まったもの。ブラジルの公的年金制度改革を政治過程との関連で分析した報告で、OHPの活用が効果的だった。改革を阻む要因として、年金制度と選挙・政党制度にかかわる制度論的な側面が強調されたが、説明要因の順位や、改革反対勢力の内実などについて質疑が続き、分析視角を明確化すべしとの指摘があった。今回はともに政治学関連の報告だったので、参加者全体の関心にまとまりが見られ、議論がかみ合ったのは幸いだった。ただ逆にいえば、地域研究的な一層の発展を期するには、各自の専門領域の越境もいとわない、積極的な問題提起や議論が必要となることも確かであり、そのためには今後とも、より多様な会員の参加が求められよう。

(新木秀和 早稲田大学)

○脱「スルタン支配型」体制：理論モデルとラテンアメリカの事例

尾尻希和・寺田純子・稲森広朋
(上智大学大学院)

「スルタン支配型体制」とは、リンス(Juan Linz)が非民主主義体制のひとつとして提示した概念で、伝統的統治ではない家産体制を指し、その最大の特徴は著しく恣意的な個人統治形態をとることである。

本報告では、スルタン支配型体制以後の政治体制すなわち「脱スルタン支配型」体制の概念化を試みた。その概念化にあたり、リンスが民主体制の定着に必要であると提唱した政治体の5領域(政治社会、市民社会、経済社会、立憲主義、国家機構)のうちから、立憲主義を除く4領域の相互関係に注目した。次にラテンアメリカの4事例としてリンスが『脱スルタン支配型体制』(ジャハビとの共

編、1998年)で取り扱ったドミニカ共和国のトルヒーリョ体制、キューバのバティスタ体制、ニカラグアのソモサ体制、ハイチのデュバリエ体制に、パナマ(ノリエガ体制)とバラグアイ(ストロエスネル体制)をつけ加えた合計6カ国に「脱スルタン支配型」体制概念を適用し比較分析した。その結果「脱スルタン支配型」のサブタイプとして3類型を抽出した。

○ブラジルにおける公的年金制度改革の政治過程

高橋百合子(東京大学大学院)

カルドーゾ現政権は、1995年の政権発足以来、年金財政赤字再建を目的として公的年金制度改革に必要とされる憲法改正作業に取り組んできた。改革初期の段階では、同政権は議会の圧倒的多数を占める与党連合を支持基盤としている点、および改革反対派の労働勢力は結束を欠いている点は改革推進要因と考えられたが、実際の改革は難航を極めている。

本報告は、「年金制度」と「政治制度」の両制度が利害対立の帰結に与える影響に着目し、改革挫折を説明する試みである。まず、ブラジルの「職域別年金制度」は、反改革勢力内部に亀裂をもたらす。最大労働組織のCUTと労働党(PT)が民間労働者のスキーム(RGPS)の既得権を擁護する一方、議会多数派の年金受給議員が公務員と結託して公務員スキーム(RJU)の改革に反対する。そして、非拘束名簿式比例代表制に依拠する、個別利益優先型の「分断的政党システム」が、連立政権内部の年金受給議員に改革阻止の機会を提供する結果、改革を行き詰まらせている。

《中部日本部会》

中部日本部会は12月2日(土)13:30-17:00、愛知県立大学スペイン学科共同研究室で開催された。13名出席。報告者と要旨は以下のとおりである。

○1920年代メキシコに見る国民文化の創造

一バスコンセロスの教育・文化政策をめぐって一

田中敬一（愛知県立大学）

バスコンセロスは今日のメキシコの教育制度及び国民文化の基礎を築いたと言われ、その功績は高く評価されている。本報告では、まず初めに彼のメスティーソ文化による国民統一理論を、同世代のモリーナ・エンリケス及びマヌエル・ガミオの思想と対比しながら、分析した。

次に彼の行った教育・文化政策、特に一般大衆に対する芸術教育に焦点を当て、バスコンセロスが芸術のメシア的役割を信じ、芸術の普及によるメキシコ国民のアイデンティティの確立を目指したことを明らかにした。

また彼が公共の建物を画家に開放したことでも大きく前進した「壁画運動」について、土着のテーマが国民意識を育てる接合要素となったこと。そしてこの運動は革命後の復興期のメキシコを国の内外にアピールする役割を果たしたが、バスコンセロスの思惑を越え、独自の発展を遂げたことを指摘した。

○日本の公立学校におけるブラジル人教育の現状と課題

一愛知県内を中心に一

二井紀美子（名古屋大学大学院）

本発表では、この10年の間に急増したブラジル人児童生徒を中心とした外国人児童生徒教育について、98年度の愛知県内の行政に施策と実際の学校現場の状況を検討した。全体を通して、日本語能力に課題のある外国人児童生徒教育はまだ歴史が浅く、現在のところ適応指導・日本語指導（特に初期段階）が取り組みの中心であること、またその取り組みの内容・指導体制は地域・学校ごとに大きな差が見られることや、既習歴、日本語能力が生徒ひとりひとり異なるため全体で統一されたカリキュラムがなく、指導者の主観に任せられる部分が多いこと、それゆえ指導者の質が重要になる点などを指摘した。

そして以上のような課題の解決には、外国

人生徒を学校の中でどのように位置づけ彼らにどのような学びを保障していくのか、ひいては日本人も含めて学校で何を学ぶべきかという根本的な課題への着目の重要性を提起した。

今回の報告は、ベテランと新入会員の2名によるものである。いずれも極めて活発な質疑応答が行われ、時間が足りず懇親会にまで持ち越すほどであった。

第一報告のメキシコにおける為政者が意図した国民文化や意識の形成とその後の展開は、一層増大する北米の影響と地域ブロック化の進む中で省みるべき今日的な問題提起である。

また、日本国内のブラジルやペルー出身者の児童に対する教育が報告として取り上げられたのは、ラテンアメリカが単に研究対象としての地理的領域のみならず、この地域が私たちにとって身近な問題でありうることを再認識するよい機会であったと思う。

なお、これらの報告に先立ち、愛知県立大学ラテンアメリカ地域研究小池ゼミ5名が、テーマ「ラテンアメリカにおける日本の援助」の発表を行い、先輩諸氏から様々なコメントや指導を受けた。若い世代の今後の成長が楽しみである。（水戸博之）

《西日本部会》

西日本部会研究会は、2000年11月18日（土）に同志社大学今出川学舎で9名の出席者をえて開催された。桜井三枝子氏の報告は、スペイン南部、グアテマラの先住民共同体、エルサルバドルのラディーノ共同体の3カ所でのセマナ・サンタ（聖週間）の儀礼を比較して、グアテマラとエルサルバドルのそれにはキリスト教の儀礼であるにもかかわらず、先住民の神話・伝承に依拠した先住民的要素が顕著に見られることを明らかにしようとするものであった。フロアからは、「聖週間」という共通項だけで括って他の重要な要素を考慮に入れないで比較を行うのは問題があるのではないかという意見が出された。松本健二氏の

報告は、エンリケ・ロドがルベン・ダリオの詩集 *Prosas Profanas* 第2版に寄せた序文から、ロドが詩をどのように位置付けていたかを詳らかにしようと試みたものだったが、原文解釈に関して松下マルタ会員からの貴重な助言もあった。

最近では研究部会参加者数が低迷気味のようにだが、研究活動活性化のためにも多くの会員の研究部会への参加が望まれるところである。

(山蔭昭子 大阪外国語大学)

○聖週間儀礼をめぐるエスニック集団の文化比較：中米の事例研究より

桜井三枝子 (大阪経済大学)

中世スペイン・カトリシズムが強制的に中米先住民社会に移植され5世紀が経過したが、現代スペイン南部、中米グアテマラの先住民共同体(サンティアゴ・アティトラン村)、エルサルバドルのメスティソ共同体(チャルチュアパ市)の3共同体を聖週間儀礼を媒介として、宗教的組織(コフラディア)と儀礼の過程を中心に文化比較を試みた。スペインの聖週間儀礼が聖書の解釈の演劇化に忠実なことと対極的に、グアテマラ先住民のそれはきわめて先住民の神話・伝承に依拠していることが、マヤの祖先神(マシモン仮面像)の復活再生劇に読み取れた。また、メスティソ社会のエルサルバドルの共同体ではカトリック改革派(アクシオン・カトリカ)の活動が顕著であるにも拘らず、先住民的要素が聖衣の洗浄儀礼に噴出し当局にも容認されている。儀礼に関する理論的諸研究・理論といかに自分のフィールド調査とが噛み合うかという点で視点が定まらない中間報告であったため、参加者たちから有効な指導と忠告がなされた。

○ロドのダリオ論における詩の位置づけをめぐって

松本健二 (大阪外国語大学)

ロドは、1901年に刊行されたルベン・ダリ

オの *Prosas Profanas* 第2版序文において、モデルニスモと同時代の詩をめぐるその両義的な立場を示している。ラテンアメリカ主義とギリシャ・ラテン文化尊重の文脈に基づく詩のアウラの戦略的肯定と、20世紀特有の展示的価値偏重傾向を視野に入れたアウラ喪失の的確な記述とである。

前者に関しては、安直な土着的要素描写の否定と反俗の徹底、教育と啓蒙といった要因があげられる。が、とりわけ音楽賛美にまつわる言説などにおいて、若干批判意識の不在が見られる。つまり散文言説が支配的な近代社会への強烈な対抗意識という、19世紀以降の西欧文芸、主として韻文を支配してきたあの特徴が不在なのであるが、もちろんそこには西欧と南米という異なる歴史が背景にある。また、後者に関しては、芸術のための芸術という囲い込みにより、芸術の価値が上昇・希少化するのではなく、逆に大衆化・商品化するという現代芸術のパラドックスをロドが感知していたことを、「ダリオは(現代西歐文化の)行商人であった」という一文他にうかがうことができる。

3. 学術・文化情報

○ラテン・アメリカ政経学会2000年度全国大会

ラテンアメリカ政経学会2000年度第37回全国大会は、11月4日・5日の2日間、神田外国語大学で開催された。プログラムの内容は以下の通りである。

研究報告：①細江葉子(東京大学大学院)「ブラジル北東部の農業部門における格差」、②松本陽子(東京大学大学院)「ブラジルの経済自由化と労働市場」、③住田育法(京都外国語大学)「ブラジル政治の構図：ヴァルガスからカルドーゾまで」、④柳沼孝一郎(神田外国語大学)「近代メキシコの産業開発と日本人移民」、⑤竹村卓(駿河台大学)「コスタリカの『人権外交』への道：憲法31条の成立を中心として」、⑥小林晋一郎(東京銀行リサーチ・インターナショナル)「ラテンアメリカにおけるドル化について」、⑦石黒馨(神

戸大学)・佐野誠(新潟大学)「開発パラダイムの比較分析：ポピュリズム、ネオ・リベラリズム、リベラル・ソシアリズム」、⑧山本純一(慶應義塾大学)「インターネット戦争?：サパティスタとメキシコ連邦政府のネット内外の闘争」、⑨坂口安紀(アジア経済研究所)「ラテンアメリカのビジネス・政府関係」、⑩浅野義(茨城キリスト教大学)「ラテンアメリカの年金改革とインフォーマル・セクター」。

講演：絵所秀紀(法政大学)「貧困と開発」。

パネルディスカッション：「ラテンアメリカの社会改革—効率、公正、参加」。問題提起・司会：小池洋一(拓殖大学)、報告者：①三田千代子(上智大学)「ブラジルの貧困と貧困政策」、久松佳彰(東京大学)「分配と分配政策」、③佐野誠(新潟大学)「大量失業の制度構造をどう止揚するか：アルゼンチンにおけるネオ・リベラル改革の帰結」、④宇佐見耕一(アジア経済研究所)「1990年代アルゼンチンの社会保障制度改革」。

上記のように今年の全国大会では、幅広くかつ今日的なテーマが数多く取り上げられ、非常に充実した報告内容であった。また2日目の絵所秀紀氏による講演、その後のパネルディスカッションにも多くの参加者があり、活発な議論が展開された。なお次回2001年度全国大会は京都外国語大学で開催されること決定した。(子安昭子 神田外語大学)

○国際シンポジウム「ブラジル500年—多文化社会への歩み」

本シンポジウムは、ブラジルの過去を探るのではなく、ブラジルの5世紀の歴史から人類の未来を探ろうという意図で上智大学において12月9日に開催された。

ブラジル、ポルトガル、北米からそれぞれ専門を異にする報告者4名と7名のコメントーターが参加して開催された。最初の報告者であるサンパウロ大学名誉教授オクタヴィオ・イアンニは、社会文化史の視点からブラジルの500年を取り上げ、ブラジル500年の歴

史は民族、文化を異にする人々がひとつの社会を形成して来た歴史であるとし、その過程は決して肯定的な側面だけではなく、否定的な側面も併せ持つものであるという、深い意味を持つ報告であった。歴史学が専門のジョルジュ・コート(ポルトガル・カモンイス院院長)の報告は、時代を16世紀に限定し、大西洋をはさんで行われたヒトや生き物・商品などの移動が、新たな文化を新大陸にもたらしたという文化接触論を展開し、ブラジルの基層文化形成の詳細な過程に触れたものである。ここでも異文化との出会いの形やプロセスが示唆された。法律が専門で、日伯関係に造詣の深いサンパウロ大学教授の二宮正人の報告は、日本移民のブラジル社会における貢献と最近の新しい日伯交流としていわゆるデカセギ現象に言及した。午後にはマイアミ大学教授のロバート・レヴィンが、膨大な一次資料を用いて、19-20世紀に北米のアメリカ人がブラジルに対して抱いたイメージを再構築した。地理的距離が圧倒的に離れている日本の対ブラジルのイメージとそれほど異ならないことが分かり、日本のブラジルイメージは北米を通じて形成されたのではないかと推測され、別な興味を抱かせた。

時代視点をそれぞれ異にする4人の研究者の報告からいずれもブラジル社会の持つダイナミズムを感じることができた。日本の研究者7人のコメントについては紙幅の制約からここでは割愛するが、それぞれの専門から寄せられた意見は、各報告の内容を膨らませ、政治経済以外の豊かなブラジル研究の存在を示すことに大いに貢献した。当日の参加者は、およそ350人を数え、今後のブラジル研究の発展が期待されるシンポジウムであった。

(三田千代子 上智大学)

○経企庁セミナー「チリの高成長の要因と今後の発展可能性」

再編前の経済企画庁経済協力第二課が昨年12月15日に同庁においてチリを取上げ、ラテンアメリカで「チリ・モデル」といわれるほ

ど同国が順調な成長を続けてきた理由や今後の展望についてセミナーを開催した。チリからは4名（ロルフ・ルデレス・カトリカ大学教授、ロナルド・フィッシャー・チリ大学教授、及び国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会からマヌエル・マルファン氏、アンドラス・ウトフ氏）が招待され、日本側は枝村純郎大和総研顧問、細野昭雄神戸大教授、恒川恵市東大教授、今井圭子上智大教授等16名ほどが参加した。

報告では先ず前蔵相のマルファン氏が「チリにおける長期経済成長」と題して、同国の高い成長は、安定したマクロ経済政策、市場中立的政策の遂行、及び所有権の確立によるとした。フィッシャー氏は「チリにおける貿易自由化、発展、及び政策」と題して、最近のチリの貿易政策を紹介し、有望な輸出産品としてサケ、カレイ、アワビ、ワイン、鉱山用大型ダンプ等を挙げた。ルデレス元蔵相は「1973-2000年：政府主導型経済成長から民間部門主導型経済成長への転換」と題して73年までの発展モデルは、輸入代替政策、極端な政府介入に代表されるが、その後は市場原理、「小さな政府」、民営化、社会開発に基づくモデルで成功したと説明。ウトフ氏は「チリ改革モデルにおける2つの重要要素の進展とメリット、デメリット」と題して報告、高度成長の成功の要因として特に金融の自由化と年金・社会保険システムの改革を挙げた。4人の報告によると、同国の発展モデルは、比較優位を利用した一次産品及びその加工を中心とし、産業政策等も部門に差を付けない中立的なものであった。構造改革、民活、社会開発（年金改革等）といった時代を先取りした政策を大胆に行ったことに成功の要因があると要約できる。これに対して日本側からは、サケ養殖の技術は日本の貢献大とする辛口の批評も含めて活発な議論が展開された。

加賀美充洋（日本貿易振興会・アジア経済研究所）

○シンポジウム「日系ブラジル人と日本社会—多文化共生の試み—」

外務省主催による在日日系ブラジル人に関するシンポジウムが、「日系ブラジル人と日本社会—多文化共生の試み—」をテーマに2月1日、外務省の国際会議場で開催された。ラテンアメリカの日系人のデカセギ現象についてはすでに、多くの議論や著作がみられるが、本シンポジウムの特徴は、日伯両国政府（関係諸官庁）、地方自治体、研究者、ボランティア活動家、日系ブラジル人が一堂に会して、それぞれの立場からこのデカセギ現象の問題を論じたことである。すなわち、問題提起に止まらず、問題解決の具体的方法を探ることが、可能となったことである。しかも、このシンポジウムは今回一回に止まらず、今後も定期的に開催される予定である。こうしたことから、日本におけるデカセギ現象が、一過性の現象ではなく、恒常的な現象として捉えられ、日本、特に地方でのブラジル人のプレゼンスの大きさを物語っており、地方の就労環境のみならず、教育環境にも大きな影響を与えていることが再認識されるのである。また、視点を変えれば、新しい日伯関係の展開としても捉えることができる。

当日の主なプログラムは以下の通り。

全体会合

基調講演 堀坂浩太郎（上智大学）
在日日系ブラジル人コミュニティへのブラジル側対応（ブラジル大使）
地方自治体の経験（浜松市）

分科会1.

「在日日系ブラジル人と日本社会」
司会 三田千代子（上智大学）
報告 田島久歳（城西国際大学）
塚本恭子（クルーベ・ド・ブラジル代表）
豊住マルシア（ボランティア）

分科会2.

「在日日系ブラジル人の子弟教育」
司会 渡辺雅子（明治学院大学）
報告 ジャンジーラ・前山（常葉学園大大学院講師）
梅本壺邦（神奈川県寛政高校教諭）

リンコン・フジナガ（静岡県
JABRA社代表）

分科会 3.

「在日日系ブラジル人の就労とその
環境」

司会 二宮正人(サンパウロ大学教授、国
外就労者情報援護センター理事長)

報告 鈴木康之(在日ラテン・アメリカ
労働者の相互扶助、救済基金代表)

ツトム・サコダ(サンパウロ州立
銀行東京支店長)

コーディネーター 三田千代子

○国際シンポジウム・国際学会開催のご案内

・国際シンポ「ラテンアメリカとグローバリ
ゼーション」が3月17日（9：50-20：00）
千葉大学社会文化系総合研究棟1階マルチメ
ディア講義室で開催されます。（問い合わせ
先 長谷川秀樹氏、もしくは千葉大学社文研
e-mail assist@celle.shd.chiba-u.ac.jp）

松下マルタ理事より、以下の学会開催の情
報をお寄せいただきました。関心がおありの
方は下記の連絡先にお問い合わせ下さい。

(1) X congreso de la Federación Inter-
nacional de Estudios sobre América Latina y
el Caribe. Instituto de Latinoamérica de la
Academia de Ciencias de Rusia. Moscú, 25 a
29 de junio de 2001. Información en con-
greso-ila@mtu.net.ru, ilaran@pol.ru,
http://www.plugcom.ru/ilaran

(2) Corredor de las Ideas. IV Encuentro ,
Paraguay, Asunción, 11 al 14 de julio 2001.,
Informacion, hbiagini@mail.retina.ar

(3) FORUM MERCOSUR, Asunción,
Paraguay, 24 y 25 de mayo de 2001. Infor-
mación unesco@rieder.net.py

4. 事務局から

I. 会員関係

II. 寄贈図書

○真鍋周三「18世紀アルトペルーにおけるト
ウパック・カタリの反乱の展開序論——ト
ウパック・アマルの反乱と比較して」『人文
論集』36巻1号（神戸商科大学、2000年9月）

○外務省中南米局監修『中南米諸国便覧2000
年版』ラテン・アメリカ協会、2000年。

○Op. Cit. *Revista del Centro de Inves-
tigaciones Históricas*, Núm.11 (Facultad de
Humanidades, Departamento de Historia,
Universidad de Puerto Rico, 1999)

○国本伊代『概説ラテンアメリカ史・改訂新
版』新評論、2001年。

○JT中南米学術調査プロジェクト（代表大
井邦明）『クレブラ——カミナルフユ調査
報告書別冊』たばこと塩の博物館、2001年。

III. ホームページへの掲載について

会員の関与する内外の研究集会・シンポジ
ウム・講演会等の情報を学会ホームページ
(<http://www.soc.nii.ac.jp/ajel/>) に掲載しま
す。希望される会員は広報なさりたい内容を
簡潔にテキストファイルで作成して、学会事
務局のEメールアドレスに添付ファイルとし
てお送り下さい。

第22回定期大会 研究発表、パネル等再募集のお知らせ

第22回定期大会は、6月2日(土)と3日(日)の両日、名古屋大学において開催される予定です。研究発表もしくはパネル、ワークショップ形式(3名以上)の発表を希望される方は、以下の点を明記してご応募ください。

研究発表：(1)発表者の氏名・所属・連絡先、(2)発表題目とその分野(歴史、政治、経済、文学など)、(3)スライド、OHP、ビデオなどの使用の有無。

いずれの場合も、準備の都合上、**4月20日(必着)までに報告要旨(1200字程度)**を添付して、下記実行委員会宛、書面、ファクス、あるいはe-mailにてお申し込みください。

連絡先：464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学言語文化部スペイン語学科内

第22回定期大会実行委員会

FAX 052-789-4826

e-mail k46302a@nucc.co.nagoya-u.ac.jp〔二村〕もしくは
k46240a@nucc.co.nagoya-u.ac.jp〔水戸〕

編集後記

今年は春の訪れが早いのか、公園や民家の庭先にはもう桃の花が五分咲きです。今年から春の会報の発行日を1ヵ月早めることになりました。研究部会が3月末から4月初旬に開催されることが多く、そのお知らせを早目に会員の皆様にお届けするためです。会報が届きましたら、多くの方々が研究部会に出席されますよう、また名古屋大学での定期大会にも活発な研究発表の申し込みを期待しています。(今井圭子)

No.74

2001年3月1日発行

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科

恒川恵市研究室気付

日本ラテンアメリカ学会事務局

TEL 03-5454-6458

FAX 03-5454-4339

E-mail : tunekawa @ ask.c.u.-tokyo.ac.jp

学会センターへの問い合わせ

住所変更・異動の御連絡および会費納入に関するお問い合わせは直接、日本学会事務センターまでお願いします。

(財)日本学会事務センター大阪事務所気付

日本ラテンアメリカ学会担当 大戸道子(おおとみちこ)

〒565-0082 豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル14階

Tel.06-6873-2301 Fax.06-6873-2300

受付時間 9:30-5:30(土日休み)

事務センターから本部事務局・理事会への報告には1ヵ月近くかかることもありますので、重要事項は余裕をもってお知らせ下さい。

また入会・退会手続きは理事会(通常6月定期大会時、10月中旬、3月上旬の年3回)での審議を必要としますので、本部事務局へ御通知下さい。学会事務センターへの通知だけでは行き違いになることがありますので御注意下さい。